

July
03,
2002

MWVS
MOTORHEAD SALES APPRAISAL WEEK EVENT



お神のトーチライトで
夜を照らそう

ハッピーマン

最新
ニュース

最新の
情報
が満載

元歌への
伝言



対談 インターネットの彼方に 第2回

【Guest】

佐野元春

S A N O M O T O H A R U

×

小崎哲哉

O Z A K I T E T S U Y A

構成：長野弘子 photo：Kaizuka Jun-ichi

ミュージシャン佐野元春は、詩集や雑誌の出版、マルチメディアやコンピュータへの早期からの接近などに見られるように、常に「メディア」を意識してきたパブリッシャー/エディターでもある。公式ファンサイト「MWS」の発足は1995年。数あるファンサイトのなかでも、コミュニティー意識が非常に濃密に見える。音楽の話はあえて控えめにして、「エディター」佐野元春からメディア論を聞き出してみたい。

小崎哲哉

アトムから始まったコミュニティー体験

小崎: 佐野さんはポップミュージシャンの枠を超えて、音楽以外のメディアに対して意識的にかかわってきた比類のない方だと思います。キーワードで言えば『サムデイ』コレクターズ・エディション』に代表される「編集」、また詩集『Heart Beat』や雑誌『THIS』、カセットブック『エレクトリック・ガーデン』の「出版」ですね。さらに、オーディオCDや詩集や写真集、自作のエッチングなどが1つの箱に入っているマルチメディア作品のアートボックス『Words In Motion』、ファンが作ったコミュニティーサイト『Moto's Web Server』(MWS)もあります。こうしたメディアに向けられた幅広い関心は、いつ頃からおもちだったのですか。

佐野: 僕は小学校に入る前からマンガが大好きで、鉄腕アトムに夢中だったんです。アトムには、未来に対する夢のすべてがありました。そこで、手塚治虫さんのファンクラブに入ると、雑誌やステッカー、ソノシートなどが詰め込まれたファンクラブキットが送られてくるんですね。それを開いたとき、そのコミュニティーが僕に手を差し伸べ、そこから小さな夢が解き放たれていったようなワクワクした気持ちになりました。それが、外の世界にアクセスしてそこからフィードバックがあった初めての楽しい体験で、僕がメディアを意識した最初のときでした。

小崎: ファンクラブには僕も入っていました(笑)。テレビで見る鉄腕アトムと、ノベルティーになった鉄腕アトムとは意味が違ってきますよね。ノベルティーは、自分だけに向けられた、より親密な感じがします。

佐野: インターネットもそうだと思います。構

コミュニティーが僕に手を差し伸べ、 小さな夢が解き放たれた



SANO MOTOHARU × OZAKI TETSUYA



佐野元春

SANO MOTOHARU / さの・もとはる
1980年シングル『アンジェリーナ』でデビュー。83年から84年にかけてNYに滞在し、いち早くラップ・ミュージックなどを取り入れた3rdアルバム『ピジターズ』を完成させる。また、インターネットでの音楽配信を早くから行い、ネットワークが作り出す、新しいコミュニケーションの形を模索しているアーティストとしても知られる。
Jump www.moto.co.jp

造的には多くの人に発信できるようになっていますが、実はラジオのようにワン・トゥ・ワンのコミュニケーションが成立するメディアですね。振り返ってみると、ワン・トゥ・ワンのメディアに僕はとくに興味を示してきたと思います。

小崎: メディアの使い分けに関して、佐野さんは音楽活動でも、マスに対する働きかけと、『In Motion』のポエトリーリーディングのような私的な表現を使い分けしているような気がします。

佐野: 僕のなかでは、ポップレコードもスポークンワーズ(ポエトリーリーディング)も、生まれてくる時は一緒です。ただ、ポップレコードは多くの人が聴いてくれる自信がありますが、スポークンワーズは僕の個人的な領域から発した作品なので「買ってほしい」とはなかなか言えない。だからウェブサイトで「好きな人だけ買ってほしい」と言っています。

もっとも早く届いたメッセージ

小崎: そのウェブサイト「MWS」は、ファンが作った公式サイトですけど、佐野さんにとってはどういう位置づけなのですか。

佐野: 公式ファンサイトという言葉自体あとから出てきたもので、どうあるべきかという理想的な形は、実を言うと僕もわからないですね。MWSが発足したのが1995年3月13日で、僕の誕生日にファンの有志がスタートするという感動的なものだったんです。形は変わっても、その精神がいまも受け継がれていると思います。ですから、僕の日記といったコンテンツは存在せず、新しいレコードやライブの情報をいち早くお知らせするための窓として位置づけています。インターネットでは、今日浮かんだアイデアをすぐにファンに届けることが可能で、それを実現するためにはどうしたらいいかを試しています。そのスピード感が僕にとっては魅力ですね。CDだと、最初のインス

ピレションをファンの人たちにすぐ届けることはできないですからね。

小崎: 昨年の9.11テロの折に、佐野さんは非常に迅速に『光』という曲を作りましたね。スピード性と、書いてあるメッセージの強さに感動しました。音楽をインターネット上で配信する際に、レコード会社との権利問題などは生じなかったのですか。

佐野: 契約に照らし合わせれば大きな違反があったんですけど、僕としてはやらざるをえない緊急性がありました。大変なことが僕たちの身に降りかかっているのに、権利の話をしている場合ではない、というくらい切実な問題という思いがありましたね。

小崎: 逆の見方をすれば、15日間で約8万5000件がダウンロードされたことからわかるように、インターネットはレコードで作品をリリースするよりはるかに簡単で、使い方によっては非常に効果的なメディアですね。

佐野: そうです。正式にリリースされていたら、オリコンで首位になるほどのダウンロード件数だと思うんだけど、お金になるかならないかという計算がどうしても今回のケースには馴染まなかったんですね。僕は曲を書いてレコードを作ることで生計を立てているけど、いつのまにか「表現 = 生計」という風に考えていたことに気づいたので。今回、自分が音楽とどうかわっているんだらうと改めて自問自答しました。よく考えた結果というより、やむにやまれず「僕はこう考えているけれども君はどう思う？」と音楽にして問いたかった。そして、こういう形もありだなと気がつきました。

小崎: ほかの曲でも原発の問題に言及したり、「アクト・アゲインスト・エイズ」というコンサートに積極的に関与していますね。インターネットとかわかることで、こうした活動に変化はありましたか。

佐野: インターネットのなかった80年代には、問いかけをして、みんなの意見を集約するのに時間がかかったり手続きが面倒だったりしましたが、ネット以降は手続きが随分簡単になって、意見の集約が迅速にできるようになったと思います。ただ、質に関しては昔も今もとくに大きな変化はないですね。

小崎: 結局は表現したいことがあり、その内容によってメディアを使い分けることが重

要ですね。

佐野: そうですね。今はいろんなメディアがありますから、表現者がメディアを選択できる時代だと思います。

小崎: 僕がMWSを見て幸せな気持ちになれるのは、ファンの皆さんが積極的に参加して、ネチケットが非常にうまく守られているし、スタッフの方もテキストに非常に気を使っていて挑発的な表現がほとんどないからです。また、ファンの自律的な気持ちに任せているところも好きです。さらに、佐野さん自身が発信する「ハートランドからの手紙」やラジオなどは、ダイレクトにこちらに届いてきて、僕だけに語りかけてくるような気がしますね。僕はロックの墮落というのはテレビに出るようになったときから始まったような気がするんですよ。マクレーハンの例えば、ホットなメディアであるロックがクールなメディアに墮してしまった感があります。

佐野: ネットの可能性で、もっとも期待でき

るのはウェブキャスティングです。インターネットにかかわってから今日まで、ずっと興味のあるところなんです。公共放送で何年間かラジオ番組をやっていましたが、ネットでやる番組は不思議なことに公共放送よりも聞き手に対するかわり合いの気持ちが強いんですね。テレビはたまたま声をかけられたときに出るくらいで、自分ではラジオに対する思いのほうがはるかに強いですね。

“リアル”につながるインターネット

小崎: 佐野さんは新しいツールに敏感ですが、やはり大きなターニングポイントは80年中期にNYにいて、DMXやマックントッシュに出会ったことだと思います。佐野さんの音楽の凄さというのはサウンドの厚みだと思っているんですけど、それが86年のアルバム『ビジターズ』に集約されていますね。

佐野: Macがリリースされたとき僕はマンハッタンにいて、Macを一目見ようと電気屋



インターネットは過去、現在、未来が同時に含まれたメディア



SANO MOTOHARU x OZAKI TETSUYA



を探したのですが、どこにもありませんでした。ただ、街をばらばら歩いていたら、通りがかった楽器屋さんの隅っこに、初期のMacが置かれていたのです。その後、いわゆるサンプリングという技術がレコーディングに入り込み、音楽の世界では大革命が起きました。まったく新しいコンセプトが音楽制作の過程に組み込まれ、それまでの音楽の作り方が一変する。これが80年代の中盤以降のことなんです。まさにそうした時代の黎明期に立ち会えたのは、幸運だったと思います。

小崎: 佐野さんは以前「ポップミュージックの進化はある段階で終わってしまい、あとは組み合わせに過ぎない」とおっしゃっていますよね。これはすべての表現領域に当てはまることで、美術批評家の人たちも音楽用語を使ってサンプリングとリミックスしかないと言っています。60年代後期～70年代前期にすでに映画監督のジャン＝リュック・ゴダールが「引用とコラージュ」の手法を確立していますが、REALTOKYOは、東京という街にあふれる情報をサンプリングしてリミックスするサイトでありたいと思ってるんですよ。僕は、インターネットは過去、現在、未来が同時に含まれたメディアだという仮説をもっています。アーカイブ、リアルタイムの情報発信、さらに将来の告知、これが地球規模に拡大すれば、それこそマクルーハンやバックミンスター・フラー、それ以前の哲学者テイヤール・ド・シャルダンが何十年も前に構想した、地球全体が通信網におおわれたグローバルビレッジが誕生するのではないかと思います。もちろん、貧しい国にはインターネットがまったく届いていない、「デジタルデバイド」(情報の南北格差)問題も存在しますが、可能性があるということ自体はいいことだと思っています。

佐野: そうですね。ネットで創作活動をするうえで、これまでと違うことは、そこに時間が存在し、時間軸をもったアート表現が可能であり、対話も可能であることですね。この2つが、かつての歴史のなかでは存在しなかった表現だと思えます。

小崎: MWSには、佐野さんのアルバムのタイトル名から採った「カフェ・ボヘミア」という掲示板があって、「関心空間」というエ

ンジンが導入され、キーワードでファンの方がつながれますよね。知らない人同士がほんのちょっとしたことでリンクされるという、非常にウェブ的な世界が広がっていくところがおもしろいと思っています。

佐野: ファンサイトのなかで掲示板をもつことの是非について、6年間くらい議論をしました。個人的には、ファンの方に僕の音楽という共通項があって、年齢、性別を超えているんな会話が生まれること自体がネット的でおもしろいし、未来に向けての可能性があるんじゃないかなと思っています。目と目でなんとなく理解する曖昧なコミュニケーションが浸透しているなか、ウェブではテキストベースできちんと自分の考えを述べなくてはいけない。言葉は僕らの最大のコミュニケーションツールだと思いますが、言葉を使う訓練の場として、掲示板は素晴らしい練習場のような感じがしますね。僕に限らず、MWSに集まる人は、表現して友人を作ろう、自分を見てほしいといった風に、表現することに積極的です。

小崎: 確かにメールやポスティングによる新

しい文体が生まれていますし、今はテキストベースですが、それに映像や音声を組み合わせると作品が生まれる可能性もありますね。さらに言えば、ネットの目的は最終的にはリアルなコンサート会場や映画館に足を運んでもらうことなんですよ。

佐野: 同感です。僕もファンと出会えるいちばんの場所というのは、僕のパフォーマンスを見て何かを感じてくれる、ライブの場だと思っています。ウェブサイトで出会うけど、そこで終わるのではなく、実際に僕のコンサート会場に出会う。これは大原則です。

小崎: リアルの活動を含めた、佐野さんの今後のご予定を教えてください。

佐野: 去年は活動20周年記念を迎えて、過去の作品の再編集を中心にリリースしたのですが、今年は新作に力を入れており、来春には新しいCDをリリースする予定です。また、今秋には数カ所で開催をやりたいと思っています。ライブは個人的にもすごく楽しみにしています。

小崎: MWSも含め佐野さんのリアル/バーチャル両面での活躍を楽しみにしています。



イベントを開催します。

『インターネットマガジン』では、本対談記事と連動したトークショー形式のイベントを開催しています。次回は8月2日(金曜日)@六本木THINK ZONE。ゲストは写真家/編集者の都築響一さんです。詳しくは本誌ウェブサイトをご覧ください。なお、座席数に限りがありますので受け付け終了となった際はご了承ください。

internet.impress.co.jp/realtokyo/



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp